
バカとテストと召喚獣 ~僕と病気と看護生活~

NYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～僕と病気と看護生活～

【Nコード】

N5884N

【作者名】

NYO

【あらすじ】

突発的テキスト小説第二弾 明久主人公
ただし、結構長いです。

(前書き)

突発的テキスト小説

とある日の朝。

小鳥のさえずりと、ドアの向こうから聞こえるパタパタという物音で僕は起きた。

「うん」

体を起こすために両手をからめて上に伸びる。

「……なんか変だな」

手を降ろすといつもと違う体の調子を感じた。不思議に思い、シヤッと薄緑色のカーテンを開ける。

窓の外は抜けるような青空に強く煌く陽光。

そんないい天気なのにうすら寒い……。

でも反対に体は火照っていて、景色がぐるぐる回っているような感じがする。体中に気だるい感じが付き纏い、自分でも息が荒いのがわかる。

まさか、まさかこれは

「誰か僕を呪っているのか」

無理もない。容姿端麗な上に頭脳明晰な僕をひがむ男どもの気持ちも良く分かる。

呪われても仕方ないことだと思う。

そんな感じで寝ぼけた頭を起こそうとしていると、ノックの音が聞こえてきた。

「アキくん、起きてますか？」

「あ、姉さん。おはよう」

涼やかな表情と大きな瞳をもつこの女性は僕の実姉、玲姉あきいさん。
名が知れわたった大学出身のはずなのに、日常生活部分に欠落が見られる残念な人だ。

「おはようございます、アキくん。今日はいい天気ですね」
「そうだね」

朝日が差し込む窓を眺めて、一息つく。
よかった。姉さんが起こしに来る前に起きる事が出来て。
枕もとの時計を見ると時刻は7時45分。学校が始まるまで時間があるから落ち着いて過ごせそうだ。

「さあ、きちんと朝ごはんを作って学校に行くんですよ」
「あれ？今日は作ってくれなかったの？」

いつもなら頼まなくても作ってくれるはずなのに。

「先ほどまで忘れていたのですが、今日はちょっと用事があったんです。ですので、朝食を作る時間がなさそうなのです」
「そうなんだ。それじゃ仕方ないね」
「ごめんなさいねアキくん」

その言葉に少しほっとした。
姉さんの作る料理を食べて学校に行くと、その日は授業が受けられなくなるからね。

なんて僕が思っていると、姉さんは少し小首をかしげていた。

「どうしたの姉さん」

「アキくん。昨晚は暑かったでしょうか？」

「？ 寒すぎたくらいだと思いますよ」

エアコンが効きすぎて何度か起きたくらいだから。

「いえ、それにしても寝汗が酷いな、と」

「寝汗？」

寝間着を確認すると、じんわりと染みが広がっているのがわかる。特に水をこぼしたとかそんな記憶もないから、これは本当に汗なんだろう。

「まさか、よだれではありませんよね？」

「違うよ姉さん」

本気ともとれる姉さんの発言に苦笑しながらも僕は立ちあがった。

フワッ

「あらあら、姉さんの胸が恋しくなっちゃったんですか？」

「……………」

おかしい。足元が定まらない。地面が常に揺れている気がして、焦点も定まらない。本格的に呪いが進行してきた。近くに教会は無いから神社に行ってお参りでもしよう。

「アキくん。どうしたんですか？」

「なんでもないよ」

そんな事を思いながら姉さんから距離をとる。
立っているだけで体力を根こそぎ奪われる感覚に耐えながらも、僕は倒れないようにゆっくり歩き出した。

「……アキくん、すこしベットに腰掛けていて下さい」

「え？ いいけど、なんで？」

「なんでも、です」

歩き出した足を止め、さつきまで寝ていたベットに腰をおろした。

姉さんは踵を返し、僕の部屋から去っていく。

それにしても呪いというのはひどいものだ。僕にMPマジックポイントなんであるわけがないし、お金もないから治すのは時間がかかるかもしれない。すると、姉さんが何かを持って僕の部屋に戻ってきた。

「熱を計ってみてください」

そう渡されたのは緑色の長細い箱。小刻みに震える手で箱を開けると、その中には乳白色の体温計が入っていた。

「よく場所がわかったね」

僕も覚えていないのに。

姉さんのありがたさを噛みしめて、服のボタンを開ける。

「生活チェックの時にこの家は隅々まで調べましたから」

こんな凄い姉さんなんていない。

服の中から濃厚な自分の臭いを感じ顔を背けながらも、体温計を脇の下に入れた。

その状態で待っていると、脇から鳴ったピピツという電子音。

「アキくん、渡して下さい」

「はい」

「38.3。風邪ですね」

服のボタンを閉じていると姉さんがそんなことを口走った。
風邪か……最後にひいたのは小学生の時だったかな。

「では、アキくん。チュウをしましょう」

「姉さんも風邪ひいたんじゃないの？」

完全に頭が茹っている。

「？なぜですか？」

「なんで今の会話でチュウをしようという話になるのさ」

そう言うと、『何で分からないのですか？』と言いたげな顔で小首を傾げる。沈黙の空気が流れた後、肩をすくめて姉さんはその根拠を話し始めた。

「ではアキくんにも分かるように説明しましょう」

「お手柔らかに頼むよ」

「いいですか。風邪は他の人につつした方が治りやすいのです」

ふむふむ。その話なら聞いたことがある。

「いまこの家には、私とアキくんの二人しかいません」

「そうだよね」

「だからチュウをしましょう」

「はい、そこおかしいよ」

冷静に姉さんの思考回路にツッコミを入れる。

「？ なぜですか？」

疑問符を浮かべるあなたに、その言葉をそっくりお返ししたい。

「姉さん、なんで風邪をうつすためにチュウをしないといけないの？」

「経口摂取が一番感染しやすいと思ったからですが」

「それに僕たちは姉弟でしょ」

「姉弟でチュウをすることに何か問題があるのですか？」

だめだ。根本的にだめだこの人。

「わかっていただけましたか？」

「姉さんが変態だつてことはよくわかったよ」

「ひどいですね。姉さんは変態ではありません」

説得力という言葉を辞書で調べてからその台詞を言って欲しい。

「ただ、弟の体に興味があるだけです」

「それが変態じゃなくてなんなのさ」

この人の変態の定義を教えてほしくなってきた。
でも、この程度なら風邪薬を飲めば十分登校できるだろう。マスクをしていけば、姫路さんにつつす心配もない。申し訳ないけど、姉さんに風邪薬を持ってきてもらおう。

「姉さん、悪いけど風邪薬を持って来てくれないかな？」

「まかせてください」

ぽんと豊かな胸に手を当て、自信たっぷりに答えてくれた。少し愛情が行き過ぎている部分もあるけど、基本的には弟思いの良人だ。これなら任せても大丈夫だろう。家探しをしたなら風邪薬の場所も分かっていると思うしね。

「では、アキくん。座って待っていて下さい」

「ごめんね」

「謝らないでください。家族なんですから」

パタンとドアが閉められて、僕の部屋が静かになる。

けど、姉さんが帰って来てくれていて良かった。僕一人なら風邪だということも気づけなかったし、薬の場所もわからなかった。そういう意味じゃ、母さんに感謝してもいいくらいだ。

コンコン

部屋に響くノックの音。どうせ姉さんだとわかってるから、ノックをしなくてもいいのに。姉さんの不器用な心遣いに苦笑しながらも僕は返事をした。

「どうぞ」

カチャツという軽い音とともに姉さんの姿が見える。右肘を折り曲げ漆塗りのお盆を持ち、お盆の上にはコップに注がれた水とオブラートに包まれた粉薬。ドアの開閉によって生じた風でわずかに揺れていた。

「アキくん、これを飲んで下さい」

手渡されたのは粉薬は水で流しこむタイプの薬やつだった。僕が買った覚えがないから、おそらく母さんが僕が一人暮らしをする時に準備してくれたんだろう。

苦い薬に顔をしかめ、すぐに流し込もうとコップに手を伸ばした。

(あれ？ない)

コップはある。だけど中身の水がない。もしかしたら姉さんが入れ忘れたのかもしれない。

水を持ってきてもらおうと姉さんの方を向き　　すぐにその頭を掴んだ。

「……………」

ゴクツ (姉さんが口の中に含んでいた水をのみこむ音)

「飲んでしまったじゃないですか」

「……………それ、僕のために持って来てくれたんじゃないの？」

「そうですよ」

「じゃあ、なんで姉さんが飲んでるのさ」

「アキくんは『口うつし』という看護方法を知っていますか？」

「わかってたよ！わかってたけどさー！」

頭も痛くなってきた。

「病気を治したくはないんですか」

「僕、姉さんがいない方が早く治ると思うんだ」

少なくとも精神的に疲れなくて済むことは確かだ。

「アキくん、手を離して下さい。これではチュウができません」
「もう水は中に入っていないでしょ」

「まだ唾液という手があります」

「それはもう看護という目的じゃないよね!？」

姉さんのおかげで口の中がパサパサだ。

頼むとまた同じ目にあうから、自分で水を取りに行こう。
手に力を入れ立ち上がろうとした時だった。

バタッ

「アキくん？ どうしたのですかアキくん？ アキくん!？」

あ、あれ？おかしいな。急に瞼が重……

「39.4。風邪ですね」

「(ゴホッゴホッ) わかってるよ」

先ほどより遥かに悪くなった風邪を抱えて、僕はベットに横になっていた。時間的にも体力的にも学校に行くのはもう無理だろう。今から行って鉄人の制裁を受けたら、地獄に行くのは目に見えているから。

「しかし、困りましたね。姉さんはこれから用事があるというのに」「
「そういえばそうだったね」

けど、それも遅れてしまっただろう。なんだか申し訳ない。

「僕なら一人で大丈夫だよ」

「でも……」

「姉さんは僕にそんな貧弱な育て方をしたのかな？」

「そういう言い方は、ずるいです」

ぷくーっと頬を膨らませて怒る姉さんは可愛くて、つついり苛めて
しまう。こんな僕はSなのかもしれないな。

「では、本当に大丈夫なのですね」

「うん、大丈夫だよ」

心配性な姉さんに念を押す。つとそうだ。

「じゃあさ、着替えと飲み物を枕元に置いておいてくれないかな？」

病人だからこのぐらいのお願いをしてもいいよね。

「何かリクエストはありますか？」

「じゃあ……服はなるべく通気性の良い物で、飲み物は甘いものが
いいかな」

「わかりました。じゃあ、少し待っていて下さいね」

「うん」

そういつてドアの外に出て行く姉さん。

とはいえ、時間はそこまでかからないだろう。ここは僕の部屋だから服は近くにあるし、冷蔵庫にそこまで種類はないはずだから。ドアの外に出て行ったところを見ると、まず飲み物を取りに行ってくれたのかもしれない。べつに着替えはいますぐってわけじゃないし、水分補給は大切だって言うしね。

p i p i p i p i p i p i

枕元にあつた携帯が振動しメール着信音が鳴った。

のっそりという擬音が合うくらいの速度で携帯を取り、中を開いてみると一通のメールが来ていた。

【From坂本雄二 To吉井明久 さぼりか？】

携帯の時計を見ると、時間は既に授業開始時間を過ぎている。あいつ、授業中にメールしてやがるな。ならば！

P r r r r r

「あ、雄」

ブツツ ツーツーツー

p i p i p i p i p i p i

十秒もしないうちに再びメール着信音が鳴り響いた。宛て先など分かりきっている。

【From坂本雄二 To吉井明久 今授業中だポケッ！】

予想通りの返信が返ってきて、少し心の中がスツツとした。心配させるのもなんだし、きちんとメールを返信してやることにするか。

【風ひいたんだ】

簡単な文章を打って送信する。わかったんだけど、風邪の時はじつと何かを見続けるといことがつらい。いつもなら何とも思わない作業を終えて、うとうとし始めた時だった。

ギューイイイイン

「何の音!？」

その眠気はすぐに取り払われた。

まさか、姉さん飲み物を自分で作るうとしてないよね？

体調のいい時でも致命傷なのに、こんな状態で飲んだら死は避けられない。

そんな不安を取り除く前に、地獄の扉は開かれた。

「きちんとおとなしくしていましたね？」

「まあね」

「感心です。そんなアキくんのために姉さんがとっておきのジュースを作ってきましたよ」

そうやって僕に飲み物と呼べるかどうかギリギリのラインにある物体を渡してきた。

「姉さん、用事はいいの？」

「先ほど電話をしました。少し遅れて行くと伝えておいたので心配

無用です」

どうあってもこれを飲みこむことは避けられないようだ。

「姉さん、これは何を作ったの？」

「甘いものがいいというリクエストだったので牛乳と」

「ふむふむ」

「パレオを混ぜました」

「ちよつと待って、そもそもそれ食べ物じゃないよね？」

僕の記憶だとそれは水着の一種だった気がする。

「そうですね、食べ物じゃありませんよ」

「わかってるなら、なんで」

「飲み物です」

「そう言う意味じゃないやい！」

「落ち着いて下さいアキくん。パレオだけでは苦くて飲むことができません」

「苦いって問題じゃないけど、まあそうだよな」

「しかし、驚くことに牛乳と混ぜることにより味がマイルドになり、商品として発売もされているのです」

「カフェオレ、って名前です？」

「なんだ、知っているじゃないですか」

「姉さん、それはパレオじゃなくてコーヒーなんだよ」

姉さんを傷つけないようにやんわりと言う。

「まだまだ勉強不足ですねアキくん。いいですか、コーヒーはパレオからできるのです。従って、パレオをミキサーで砕くことにより挽きたてのコーヒーの味わいを出すことができます」

どうやったら水着から液体ができるのか知りたい。
自由奔放な姉さんに頭を抱えると、足もとにある着替えに気がつ
いた。

「姉さん、着替えをとってくれないかな？」

「いいですよ」

着替えを指差すと、親切にそちらを向いてくれる姉さん。

ガラツ（僕が窓を開ける音）

バシヤ（無機物と牛乳の混合物を捨てる音）

ピシヤ（再び窓を閉める音）

「アキくんの好みに合うのが分からなかったので、三つほど持って
きました。あら？アキくん、もう飲んでしまったんですか？」

「あ、うん。すっごく喉渴いていたから」

「それはよかったです」

その無垢な笑顔が心に刺さる。

「では、この中から選んでください」

そういつて一番上にある服を手にとって渡してくれる。
さてさて、どんな服を選んで来てくれたのかな？

選択肢？：【エプロン】

一般家庭によく見られるポピュラーな服飾品。通気性に優れてはい

るが、これ単体での着用は変態の道を歩かなければならない。
と、言う訳で

「姉さん、次のを渡して」

「汗をたくさんかくと思うので、汗がしみ込みやすい服を持ってきました」

選択肢？：【ブルマ】

数年前に廃止された男子憧れの女性専用の体操服。吸水性には優れているが、これを渡すのなら上も渡してほしい。
と、言う訳で

「姉さん」

「最後のは普通の寝間着です」

選択肢？：【ブラジャー】

女性の乳房を保護する下着の一種。個人差はあるが頭にかぶる人もいれば、遊びで目に装着する人もいる。無論、僕はどちらでもない。
というか、そんな人たちでも実姉のほしくないはずだ。
と、言う訳で

「姉さん、いつてらっしゃい」

「アキくん。他に頼みたいことがないのですか？」

「うん、もういいよ」

もう、満足な結果が返ってくるとは思ってないから。

「では、お休みのチユウを」

「それはもういいから」

頭からすっぱり布団を被ると、いつもなら布団を剥ぎとってでもチユウを迫る姉さんも、追ってこなかった

「なるべく早く帰ってきますからね」

少し寂しそうな声とともにガチャンと部屋の扉が閉まる音が聞こえてきた。

頭から布団をだして誰もいない部屋を見渡す。つらく当たり過ぎちゃったかな？姉さんにしてみれば親切心で僕を看病してくれていたのに。

「よし！姉さんを安心させるために、早く風邪を治そう！」

体温で暖まっている布団に横になり、ゆっくりと目を閉じた。

「ひまだ〜」

姉さんのおかげ（せい）で健康的な生活を送っている僕にとっては、

こんな時間に寝るように体ができておらず、暇を持て余していた。せめてゲームとかをできたらいいんだけど。

ピンポン

「ん？」

霞みがかった頭に聞きなれた音が鳴り響く。近くにある目覚まし時計を見ると、すでに正午を過ぎている。どつりでお腹がすいているわけだ。

「誰なんだよ、こんな時間に」

ピンポン

とそんな事を思っている最中も、甲高い呼び鈴の音は鳴り響いている。

「セールスかな？」

足もとにあったエプロンを慣れた手つきで着け、いつもより長く感じる廊下を歩く。玄関には防犯のためか鍵とチェーンロックがかかっていた。

「はい。どちらさまですかー？」

返事をしながら鍵を外し、扉を押しあける。

後で思ったことだけど、相手の顔を確認しないでドアを開けるなんて、この時の僕はよほど頭が回っていなかったんだ。

少しだけ開いた隙間から生暖かい夏の空気が涼しい部屋に流れ込ん

できた。

「よう明久、元気か？」

「明久よ、具合は良いのか？」

ドアの向こうにいたのは無骨な顔をした男と野原に咲く一輪の華のように華麗な美少女。そんなありきたりな表現しかできないけど、実際そのような人たちだ……って

「雄二、秀吉」

「元気そうだな」

「いや、誰かと思ったよ。比較するものが近くにあるとより綺麗に見えるんだね」

「おいおい、綺麗じゃなくて整っているって言ってくれ」

「えっ！？雄二が反応するの!？」

その反応に僕もびっくり。

「……………暑い」

「ウチもいるわよ」

「明久君、大丈夫ですか？」

「ムツツリーニ。美波。姫路さんも」

これは嬉しい。ちょうど話し相手が欲しかったところだ。

「じゃあ、立ち話も何だし、あがってよ」

皆を招き入れて、リビングへ続くドアを開ける。昨日掃除をしておいたから、そこまで散らかってないはず。

「ところで明久？」

「なに？」

「お前、料理を作っていたのか？」

そういえば、今の僕はパジャマにエプロンという奇妙な格好をしている。

けど、ここはそういう事にしておこう。身内の恥を言いたくも、言う元気もないし。

「そつだよ」

「なら……お前は何を作っていたんだ？」

リビングに散らかっていたのは、切り刻まれた女性の下着と水着。

「何やってんだあのバカ姉があーっ！！」

さてはパレオが分からなくて適当にたくさん入れたな！どうりで飲み物がカラフルだったわけだ。

「明久よ、服は食べ物ではないぞ」

「……………謝れ」

「秀吉、僕は常識がある方だから！そしてムツツリーニ、お願いだからカッターをこっちに向けないで」

こんなのが日常だと思われたら僕は変人だと思われてしまう。

「大丈夫ですよ明久君」

「そつだよね。姫路さんは分かって」

「隠し味に使ったんですよね」

この人の料理の感性はどうなっているのだろう。

「はいはい、そんな事やってないで片付けるわよ。こんな状況じゃアキも暮らしにくいでしょうし」

そう言って散らばっている布をできる範囲で片付けてくれる美波。こういう家庭的なところは実に女の子らしいと思う。こういう姉さんなら大歓迎なんだけど。

「美波なら良いお嬢さんになれるよね」

「こんな所に大きなゴミがあるわね」

「ごめん！謝るからっ！謝るから手の関節をそっちの方向に曲げないで！！」

前言撤回。こんな暴力的な姉さんはいりません。

「ふん、それでアキ？」

外された関節を自分で戻していると、美波が少し心配そうな目で話しかけてきた。

「体の具合はいいの？」

「うん。少し休んでたら良くなったみたい」

「で、栄養のあるもんは食ったのか？」

「いや、実はまだなんだ」

実を言うと、さっきからお腹が鳴りっぱなしだったりする。さすがに雄二たちが来てくれたのに一人で食事をするのもどうかと思うし。

「そうか、なら丁度いい。飯を作ってやるよ」

「ありがとう」

「何かリクエストはあるか？」

「なんでもいいよ」

ここは雄二の優しさに甘えるところでしょう。こいつの料理の腕は確かだし、自分で作る元気もないしね。

「さ、坂本君！」

雄二が僕の着けてるエプロンをひったくろうとしていると、いつもおとなしい彼女が突然大きな声をだした。

「お昼なら私につくらせて下さい！」

死の予感。

「姫路さん。ありがとうけどここは雄二に任せて」

「明久君の役にたきたいんです！」

小動物のように懇願する姫路さん。だけど、ここは引くわけにはいかない。なにせ、僕の命が関わってくるのだから。

「べつにいいぞ」

「雄二！」

「坂本君」

「ただし、姫路は病人食、つまりおかゆを作れ」

「おかゆ、ですか……」

「そうだ。明久は優しいから、姫路が作った料理なら無理してでも食うだろうしな」

「わかりました」

そう言っただけで姫路さんはキッチンの方に走って行った。
なにしてくれやがったんだこの野郎。

「そんな目で見るな明久。俺も傍で見ていてやる。疲れた時は俺の手料理よりも、好きな女の手料理の方がいいだろう?」

「そりゃ、そうだけど」

その女の子が必殺料理人なら話は別だ。

「おかゆなんて白米以外に何も使わないんだ。いくら姫路でもそこまで変な料理を作るわけがない」

「でも」

「それにな、学校でお前の事を話したら、いの一番に『お見舞いに行きましょう』って言ったのはあいつなんだ。そのところを少しわかってやれ」

「……わかったよ。ってあれ? 学校は?」

今日は半日だという事は聞いていない。

「さぼった」

「さぼった!?!」

「ああ、明日は鉄人の鬼の補習が待っているってことだ」

「わかってるならなんで……」

「それでも、皆お前が心配だったんだ。無論、俺もな」

こいつ、本当は仲間思いのいい奴なのかもしれない。

「さて、俺もキッチンに行くか」

雄二は姫路さんの後を追うようにキッチンへと消えていく。僕も皆が待っているリビングに向かった。

「お待たせしました」

料理が出来るまで暇なのでトランプで遊んでいると、キッチンの方から姫路さんが出てきた。

手に持っているおかゆはほんのり湯気が立っていて、とてもおいしそうだ。これなら、今日一日生き延びれるかもしれない。

「じゃあ、少し遅い昼食にしましょうか」

「なら、片付けはワシがしようかの」

「……飲み物」

「じゃあ、僕はコップでも」

「アキは座ってて、ウチたちが全部やるから」

せめて胃薬の準備だけはさせて下さい。

「こっちも出来たぞ」

「雄二、何作ったの？」

「ああ、小腹がすいているからな。冷蔵庫にあるもんを使ってチャ

「ハンを作ってみた」

雄二の両手にあるチャーハンは香ばしい臭いを放っていて、米はパラパラで一粒一粒が卵で覆われていて、見ただけでも旨いとわかる。本当に器用なやつだ。

「（ねえ、大丈夫なの？）」

「（ああ、心配するな。米は俺が炊いた）」

そんな雄二の言葉に安堵し、目の前のおかゆをみる。

少しだけ焦げた部分があるから、火の加減を間違えてしまったのかもしれないけど、いつもに比べれば可愛いほうだ。

「「「いただきまーす」「」」

手を合わせ号令。

雄二たちはチャーハン。僕はおかゆという少し貧富の差が見られる食卓だけと文句は言えない。

目の前に置いてある器にスプーンを差し込む。

「そついえば」

「ん？」

さつそく食べようとした所で雄二が話しかけてきた。「こっちはお腹が減っているというのに。」

「昼食は用意して貰ってなかったのか？」

「ちよつと出がけにバタバタして準備できなかったんだ」

「そうか、なら丁度良かった。いや、俺らが出過ぎた真似をしてないか心配だったんでな」

「姉さんなら、喜びはするけど怒りはしないよ」

そう言っつて視線を元に戻すと、

ドロ

「……………あれ？」

差し込んだスプーンが溶け、おかゆの中に銀色の液体が入り込んでいた。

よく考える吉井明久。君は今確かに先端のあるスプーンを入れたはずだ。そして雄二に話しかけられた間、スプーンを掴んではいたが目を離していた。容疑者は五人、黙々とチャーハンを食べる美波、驚いた様子でこちらを見ているムツツリーニ、秀吉、雄二。そしてこれを作った姫路さん。この食事中に大きな動きをすれば誰かが気づくだろう。唯一可能なのは隣に座っている雄二だけど、雄二に不自然な動きは見られなかった。

なら、犯人は

「どづいうこと」

雄二にアイコンタクトを送る。

「知らん。だが確かに米は俺が炊いた」

そうアイコンタクトを返してきて首を左右に振った。目を見る限り嘘はついてなさそうだ。

「姫路さん、これどうやって作ったの？」

「おかゆ、ですか？ えっと、まず坂本君が炊いたお米を少し分け

てもらって」

「うんうん」

「おかゆはなるべく溶けていたほうがいいと言うので、硫酸を加えました」

硫酸：溶解作用のある液体。飲んだ瞬間胃が溶けることは現実である。

「あ、まさか溶けすぎていましたか、なら丁度水酸化ナトリウムもありますけど」

水酸化ナトリウム：強塩基の液体。ガラスを溶かすため保存は難しい物質である。

硫酸と混ぜた際、多量の熱を発生する。

「い、いやこれぐらいでいいよ」

砂糖を塩で中和するとかそんなドジが可愛く思えてきた。

「雄二。僕チャーハンが一口欲しいな」

「いや、お前は病人だろ。きちんとおかゆを食べろ」

『坂本は優しいわね。ウチなら一口ぐらいあげちゃうかもしれないのに』

『そうですね。心を鬼にして明久君の体調を気遣ってあげるなんて私ならできません』

いいえ。僕の命を気遣ってないのです。

「ははっ、何言ってるのさ雄二。そうだ、なら雄二もおかゆ食べて

いいよ。僕はそんなに食べれないし、雄二はそれだけじゃ足りないでしょ」

「ほう、お前は俺に死ぬと言ってるのか？」

「坂本君。私の料理って食べると死ぬんですか……」

「違うんだ姫路。そのおかゆはな米を炊いたのは俺とはいえお前の手作りだ。想像してみてください。学校をさぼって女子の手料理を食べたことが翔子にバレた後の俺の状況を」

雄二の状況。ふむ、考えられる上でしっかり考えてみよう。

えっと、事情が事情とはいえ、雄二が霧島さんに見つからないように女の子の手料理を食べているということは変わりないから

「分子、原子」

「お前風邪ひいていた時の方が頭が回るんじゃないか？」

褒められると嬉しい。

「と、まあそういうことだ。だが、そうだな、一口ぐらいならいいだろう」

そう言っつて、雄二の皿ごと僕に渡してくれる。

「いや、別にスプーンは渡してくれなくてもいいんだけど」

「お前のスプーン溶けてんだろ」

「そうだった」

なら、ここは雄二のスプーンを使わせてもらおう。雄二なら気兼ねなく貸し借りができるし。

「あ、明久君。私のを食べませんか？」

「ア、アキ。ウチのでもいいのよ」

「え？ でも僕そんなに食べられないよ」

「食べられなくてもいいんです。スプーンをくわえて下さい」

「そうよ。スプーンをくわえればいいのよ」

「待つてよ二人とも！僕の記憶ではスプーンは食べられないはずだよ！」

「とりあえず食べて下さい！」

「むぐっ」

そう言つて僕の目の前に置いてあつたおかゆを僕の口の中に押し込んでくる姫路さん。

嬉しいけどこれは別の意味でマズイ！

「の、飲み物」

「飲み物ですか？いま持つてきますね」

込み上げる吐き気を抑え、流し込める物の到着をまつ。

「はい、どうぞー！」

生きるために、渡された飲み物を一気に飲み込んだ。

『寝ちやっ たみたいね』

『子供みたいで可愛いです』

『そうね。こんな無邪気で。ふふっ、葉月みたいな寝顔』

『よほど疲れたみたいみたいです』

『体調は良かったみたいだから、明日は学校に来れるといいんだけど』

『ど』

『でもよかったです』

『ええ、よかったですわね』

『『こんな美味しそうなカラフルなジュースが冷蔵庫に入っていて』

』

(後書き)

序盤は良かったんだけど、雄二たちが来てからテンポが悪くなった。ちよつと反省。

落ちはまだまあだと思っではいるんですけどね。

原作とのズレがあるかもしれませんが、そこは目をつむって下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5884n/>

バカとテストと召喚獣 ~ 僕と病気と看護生活 ~

2010年10月9日15時55分発行